

宗教的文化遺産の保全と 他者への寛容

パキスタンより

野口 淳のぐち あつし

NPO 法人南アジア文化遺産センター理事・事務局長



文化遺産を受け継ぎ保全するとき、それが自分の集団や宗教、文化に属するものではない場合、どのように向き合えばよいだろう。
この地を去ってしまった、あるいはまだ見ぬ「隣人」のために、できることは何か。

宗教コミュニティの対立と 文化の破壊

異なる宗教コミュニティが隣接し、混在しているとき、ふと起きたきっかけで生じた対立感情は、ときに相手集団の根絶を主張するほどに過激化する。増幅する憎悪は理性のたがを外し、性的暴行、生命を軽視した残虐行為へと至るだけでなく、相手集団の文化や伝統に矛先が向けられ、甚大な被害をもたらすこともある。近年では過激派組織ISの活動に起因して、特にイ

スラム教徒が宗教・文化遺産に対する攻撃や破壊を繰り返すというイメージが強まっているように思われる。

受け継がれる寛容性

筆者は、パキスタンにおいて考古学調査に従事してきた。旧英領インドの北西部にあたる同国では、今日では約一億八千万人の国民の九割以上がイスラム教徒である。

しかしそれはきわめて現代的な状況でもある。もともと旧英

領インドのなかでもイスラム教徒の比率が高い地域だったが、分離独立の際に、ヒンドゥー教徒、シーク教徒のほとんどが現インド側へ逃れた一方で、多数のイスラム教徒がパキスタン側へ流入した。現在の宗教集団の分布が形成されたのはわずか半世紀ちょっと前のことである。それ以前は、移り変わる支配者・王朝の下、異なる宗教コミュニティがモザイク状に分布していた。もちろん衝突も少なからずあっただろう。し

かし共生的な関係の方が長く続いていたと記憶され、記録されている。

分離独立後、パキスタン側には多数のヒンドゥー、シーク寺院が残された。旧主を失った宗教的文化遺産のうち少なからぬものが、ワクフ（共有の財産）として地域のイスラム教徒コミュニティの管理下となった。そのうちいくつかは今でも宗教施設のまま維持され、旧主である他宗教集団の巡礼を迎えているという。

たとえばハイバル・パフトゥンフワ州マンセーラ郡チッティ・ガッティ村に残るヒンドゥー寺院は、現在、地元のスラム教徒の名家の管理下にある。周辺にはもはやヒンドゥー教徒はいない。しかし重要な祭礼に際し、パキスタン国内だけでなくインド側からも巡礼が訪れるという。寺院を管理するイスラム教徒の一家は、郡役所と連携して巡礼者に保護と便宜を提供している。

ちなみに「チッティ・ガッティ」とは【白い石】の意であり、リングを指し示すことが、地元のスラム教徒にも認識され



チッティ・ガッティの【白い石】(リング)

ている。しかし忌避され名称を変更されたり、寺院やリングが「偶像」として破壊されたりすることはない。

真摯に向き合う

この国で、異なる宗教やその文化遺産に敬意を抱き、保護しようとする姿勢は、一部の市井の人びとにだけ見られるものではない。昨年(二〇一六年)五月、パキスタンで出土した黄金製容器に収められた仏舍利が、約一カ月にわたって仏教国スリランカに招来された。これは世界遺産タキシラの一角、ダルマラー

ジカ遺跡のストゥーパから出土したものである。スリランカは、文化大臣だけでなく高位の仏教僧も含む代表団を派遣、儀式を執りおこなって招来された仏舍利はコロンボ近郊の仏教寺院に安置され、多数の敬虔な仏教徒が参詣した。つまり完全に宗教的な対象、聖遺物として扱ったのである。



タキシラ博物館に展示されている仏舍利容器(右)

一方パキスタン側は、タキシラ博物館の学芸員を、保護管理者として同行させた。もちろん普段は、博物館のケース内に展示されており、あくまで考古・美術資料としての扱いである。もう数百年に渡ってパキスタンの地に仏教徒は絶えて久し

く、仏舍利を自らの信仰に則って神聖視するものはいない。しかし、それを考古・美術資料としてだけ扱うことを他者に強いる。両義的であることを認め、異なる集団・社会の要請に真摯に応えているのである。筆者は

たまたま、スリランカの代表団の訪問中にパキスタンにおり、大臣を筆頭に考古・博物館局長からスタッフまでパキスタン側が精力的に対応している様子をつぶさに見る機会があったので強く印象づけられた。
「我々は自身の信仰に真摯だからこそ、異なる宗教に対してはその信仰心を尊重し真摯に対応する」という共同研究者——英国で学位を取得した考古学者であり同時に敬虔なイスラム教徒でもある——の言を聞いたとき、果たして、欧米や日本の政府、博物館、研究者らは同じような対応を取ることができるのかどうか、と考えた。
今日、文化遺産の保護や管理は学術的にも技術的にもどんどん進歩しているとわたしたちは考えるが、対象とどのように向き合い、受け止めるのか、またそれを媒介として他者とのような関係を築き得るのか、あらためて根本的な部分を問い直されているような気がした。その答えを、追い続けてみたいと思う。